



— 口腔機能低下症の診療を実施している医院の事例を紹介します —

「口腔機能低下症」は、う蝕や歯の喪失など従来の器質的な障害とは異なり、いくつかの口腔機能の低下による複合要因によって現れる病態。7つの下位症状のうち3項目以上該当する場合に「口腔機能低下症」と診断されます。詳細は日本歯科医学会発信の「口腔機能低下症に関する基本的な考え方」をご参照ください。

▶ 舌機能にフォーカスした機能訓練を実施 予防歯科では口腔機能を診る時代に

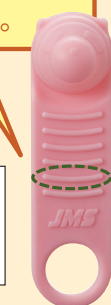
当院では、予防歯科を通じて高齢者でも歯が残っている患者さんが多くなってきましたが、嚥下など口腔機能に問題のある患者さんが増えてきています。そのため食塊形成や嚥下を行うのに重要な器官である、舌機能の訓練に力を入れており、その結果「水が飲みやすくなった。」と口腔機能改善を実感されている患者さんもいます。

Point! 舌後方を訓練する場合は咬む位置を奥にするように指導。

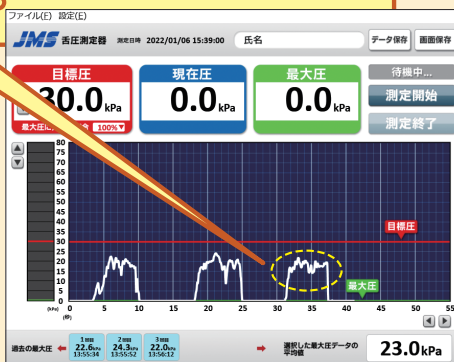
Point! 最大舌圧の持続時間にも注目! 5秒以上を目安に指導。

実施している機能訓練

- ペコぱんだを用いた抵抗訓練
- 口を閉じた状態での舌回し
- 舌の突出
- 舌鳴らし



ペコぱんだ (JMS)



舌圧検査の結果。舌圧測定データ表示用ソフトウェアを活用し、グラフを用いて視覚的に説明。



加古 歯科医院
(愛知県知多市)

院長 加古 祐輔 先生

今からさかのぼること25年、当時う蝕が多発している時代に当院は予防歯科専門施設を設立し、多くの患者さんに愛され、月1500名ほどが予防歯科のみに来院していただけの施設にまで成長しました。そして、今となってはう蝕歯数は大幅に減り、予防歯科への国民の認識も大きく変わりました。近年う蝕、歯周病への予防治療は確立されてきましたが、団塊の世代が高齢者・後期高齢者となっていく中、オーラルフレイルに対する治療は未だ不完全といえます。今後オーラルフレイルへの対応は、予防歯科を推奨する医院の必須課題だと考えております。

症例



患者: 76歳 女性

物がよく噛めなくなってきたとの主訴がある患者さんで、年齢と欠損歯の状態、義歯新製時の咀嚼能力の低下を診断し、口腔機能低下症の疑いを持って検査を実施。

	初回	3ヵ月後	6ヵ月後
口腔衛生状態(%)	33	17	11
口腔乾燥	21.6	23.9	22.8
咬合力(残存歯数、本)	15	15	15
舌口唇運動機能(回/秒)	pa 5.2	6.4	6.4
	ta 5.4	6.8	7.0
	ka 5.8	5.8	6.4
舌圧(kPa)	24.8	38.8	44.2
咀嚼機能(咀嚼能力検査、mg/dL)	88	156	164
嚥下機能(EAT-10、点)	0	0	0



ユニットの稼働率を維持するため、検査・訓練はコンサル室にて実施。

〈検査当日〉口腔乾燥、咬合力低下、舌口唇運動機能低下、低舌圧、咀嚼機能低下の5項目が該当し、口腔機能低下症と診断。口腔乾燥は服薬のため機能維持、その他の該当項目は機能向上を目指す管理計画とした。機能訓練としてペコぱんだ(Sピンク): 軟らかめ(5回3セットを1日3回)、舌回し、舌突出、舌鳴らしを指導。

〈1ヵ月後、2ヵ月後〉管理のため、ペコぱんだを持参してもらい舌圧訓練を実施。1ヵ月後にペコぱんだを(MSムラサキ): やや軟らかめに、2ヵ月後に(Mグリーン): 普通に変更した。

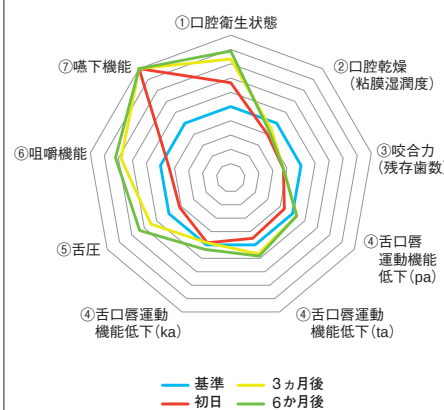
〈3ヵ月後〉該当項目が3項目となった。「か」が言いにくい、舌挙上運動としてペコぱんだを押し込んだままキープする訓練を追加で指導。

〈4ヵ月後、5ヵ月後〉前月と同様の舌圧訓練を継続して実施。

〈6ヵ月後〉該当項目が2項目になり回復したため、通常の定期健診へ移行。患者さんからは「固いものが噛めるようになり、滑舌が良くなった。」とのお話があった。移行後6ヵ月後に再検査を予定。

Point! 低下している項目が視覚的に分かるので、患者さんの理解が得やすい。

【口腔機能検査】



レーダーチャートを用い、検査結果を説明



口腔機能低下症の自覚がない患者さんも多く、実際に検査をして結果を説明するとトレーニングしなきゃいけないと意識してくださる方が多かったです。トレーニングでは舌圧や唾液腺のマッサージなども行いましたが、患者さんと楽しくお話するのも筋機能のトレーニングにもなると思い、たくさん会話をするように心がけました。患者さんから「ここに来るのが楽しみのようになった。」と実際に言っていたときはやりがいを感じました。(歯科衛生士 関野 未久さん)

※2022年2月現在の情報です。

